



名大トピックス

No.116 平成15年1月31日発行 名古屋大学総務部企画広報室 編集 〒464-8601 名古屋市千種区不老町 TeX(052)789-2016
ホームページ URL <http://www.nagoya-u.ac.jp>

国際教育協力懇談会・シンポジウムを開催



アフガニスタンの生徒ら



パネルディスカッション

CONTENTS

国際教育協力懇談会・シンポジウム(名古屋)を開催..... 2	農学国際教育協力研究センターが 第9回オープンセミナーを開催..... 9
高効率エネルギー変換研究センターが 創設記念講演会・祝賀会を開催..... 4	愛知地区国立学校等生涯生活設計セミナーを開催..... 10
国際フォーラム「アジアの高等教育改革の戦略と展望」を開催... 4	総長等表敬訪問一覧(14年10~12月)..... 11
地球水循環研究センターが公開講演会(第2回)を開催..... 5	第25回名古屋大学OB・職員懇談会を開催..... 11
特許セミナーIN名古屋大学を開催..... 6	新任部局長等の紹介..... 12
年代測定総合研究センターで体験学習を開催..... 7	発展途上国(マレーシア・ミャンマー・モンゴル)の 保健医療実状に関する調査..... 14
「農業ふれあい教室」を附属農場で開催..... 8	本学関係の新聞記事掲載一覧(14年12月分)..... 16
農学のフロントランナーを刊行..... 9	



国際教育協力懇談会・シンポジウム(名古屋)を開催

12月12日、経済学部第1講義室で国際教育協力懇談会・シンポジウム(名古屋)を開催しました。

このシンポジウムは、文部科学大臣の私的懇談会として平成13年10月に設置された「国際教育協力懇談会」(座長・中根千枝 東大名誉教授)の最終答申を受け、全国各地(6地区)で開催されており、京都、札幌に続き第3回として文部科学省との共催により開催したもので、池坊文部科学大臣政務官、松尾総長、佐々木副総長、伊藤副総長、小池事務局長をはじめ多数の大学関係者、一般市民等約470名が参加しました。

今回のシンポジウムは「アフガニスタンにおける支援・協力」をメインテーマとして掲げ、最初に池坊政務官から、アフガニスタンを含む復興国において教育が果たす役割はとりわけ重要であり、平和国家である我が国が教育分野において積極的な支援を行うことは大きな意義と効果がある旨のあいさつがありました。

続いて松尾総長から、国際協力、特に人づくりのための協力が最も重要であるという認識が高まっている現在、初等教育、中等教育そして高等教育のそれぞれ

において、より多くの教官が参加・協力し、効率的で効果的な質の高い協力を推進することが求められており、今回のシンポジウムを通して現地のニーズと日本の協力の具体的な在り方を考究するとともに、現職教員による教育協力への参加、大学における国際協力の促進について深く論議をしていただき、我が国の教育界、特にこの中部地域の関係者の中で深い理解を共有し、新しい地平を切り開いていく契機にしたいとの話がありました。

特別企画「アフガニスタンに見る国際協力」では、川上国際協力事業団総裁、山本国連難民高等弁務官事務所元カプール事務所長の講演が行われた後、伊藤静岡県総合教育センター副所長によりアフガニスタンの子供たちの招へい事業についての説明があり、アフガニスタンから招へいされた教師と生徒2名とともに、アフガニスタンの教育の実情について具体的な報告が行われました。

また、シンポジウムには愛知県刈谷市立富士松東小学校の児童68名が、同小学校で実施したアフガニスタ



松尾総長のあいさつ



池坊政務官のあいさつ

ン支援募金で購入した学用品等をアフガニスタンの生徒に贈呈し、会場からは盛大な拍手が送られました。

続いてパネルディスカッションを二部構成で行い、青年海外協力隊事業による現職教員の派遣、大学における協力の現状についてそれぞれ報告と質疑応答が活発に行われました。

なお、当日のプログラムは次のとおりです。

主催者あいさつ

池坊保子 文部科学大臣政務官

松尾 稔 名古屋大学総長

特別企画：アフガニスタンに見る国際協力

日本によるアフガニスタンへの支援

- JICA の取り組みを中心として -

国際協力事業団総裁(国際教育協力懇談会委員) 川上隆朗氏

アフガニスタン支援 - 日本に求められるもの

- アフガニスタンの実情と UNHCR の活動 -

国連難民高等弁務官事務所元カブール事務所長 山本芳幸氏

アフガニスタンの子供たちはいま

- アフガニスタンの子供たちと話してみませんか -

静岡県総合研究センター副所長 伊藤育子氏

アフガニスタンの教師及び生徒からの報告

教師：ホマイラ・ホマドアキュバルさん

生徒：シャハナズ・サルダルアカさん、
ホセシンアカ・サイエドダブドさん

通訳：ファタナ・サーベさん

(セーブアフガニスタンチルドレンの会)

パネルディスカッション

司会・導入 文部科学省大臣官房国際課 国際協力政策室 岡谷室長、田辺国際協力調査官

PART 1 この子たちの未来のために - 現職教員による教育協力 -

パネリスト

JICA 青年海外協力隊事務局国内課長 野津義男氏
愛知県立名古屋豊学校教諭 里村京子氏(青年海外協力隊経験者)
愛知県教育委員会教職員課管理主事 青木睦彦氏

PART 2 大学は何ができるか - 知的資源を国際開発協力へ -

パネリスト

国際協力銀行 開発金融研究所総務課長 小中铁雄氏
東京農工大学学長 宮田清蔵氏(国際教育協力懇談会・委員)
名古屋大学農学国際教育協力研究センター長 竹谷裕之氏





高効率エネルギー変換研究センターが 創設記念講演会・祝賀会を開催

高効率エネルギー変換研究センターの創設記念講演会が12月9日、ベンチャー・ビジネス・ラボラトリーにおいて開催され、学内外の関係者約60名が出席しました。

この講演会は、平成14年4月1日に学内共同教育研究施設として設置された同センターで行われている研究内容について紹介し、活動内容等を深く理解してもらうことを目的に開催されたもので、片桐晴郎 同センター教授による「最近のガスタービンの技術動向について - 自動車用セラミックガスタービンとケミカルガスタービン -」、中川二彦 客員教授による「鉄鋼業における最近のエネルギー高効率利用技術と今後の展望」、謝 裕生 客員教授による「中国エネルギーの発展戦略と研究」をテーマにそれぞれ講演が行われ、参加者は真剣に聞き入っていました。

講演会終了後にはグリーンサロン東山において祝賀会が行われ、出席者全員でセンター設立の喜びを分かち合いました。

同センターは、化石燃料の化学エネルギーを利用したケミカルガスタービンの基盤研究と廃熱等の低位エネルギー有効利用技術研究を融合し、従来40%に過ぎなかった発電効率を限界効率にまで高め得る最先端技術の研究開発を行うことを目的としており、時限到来に伴って廃止された高温エネルギー変換研究センターで行われた研究をさらに発展的に進めていくことが期待されています。



国際フォーラム 「アジアの高等教育改革の 戦略と展望」を開催

教育発達科学研究科及び高等教育研究センターは12月17日、文系総合館カンファレンスホールにおいて、「アジアの高等教育改革の戦略と展望」をテーマに国際フォーラムを開催し、東アジア、東南アジアの比較高等教育学の専門家らが参加して、大衆化、プライベート化（私事化）、アクレディテーション（質的保証）、グローバリゼーション等について議論を行いました。

はじめに基調講演として、フィリップ・アルトバック ポストンカレッジ教授による「アジアの大学 - 21世紀の挑戦」及び閔維方（ミン・ウェイファン）北京大学副学長（教授）による「急速な経済発展下における中国高等教育の改革戦略」が行われました。続いて、「アジアの高等教育改革の戦略と改革」をテーマにシンポジウムが行われ、金子元久 東京大学教授、韓崇熙 ソウル大学副教授（韓国）、ジャヤラム ゴア大学教授（インド）、ファム・ラン・フォン ヴァンラン大学副教授（ベトナム）、パイトゥーン・シンララート テュラロンコン大学教授（タイ）、モリー・リー マレーシア科学大学教授（マレーシア）の6名のパネリストによる報告及びディスカッションが行われました。



地球水循環研究センターが 公開講演会（第2回）を開催

地球水循環研究センターは、12月5日、シンポジオンホールにおいて、愛知県、名古屋市及び名古屋地方気象台の後援を得て、一般市民を対象とした公開講演会を開催しました。

この公開講演会は、地球水循環研究センターが平成13年4月1日に全国共同利用施設として創設されて2年目を迎えたことを機に、今後の研究の発展をめざして、センターが掲げる「地球水循環」の中でも日本への影響が大きい「東ユーラシアの地球水循環」をテーマとして開催されたもので、学内外から約120名が参加しました。

はじめに中村センター長から「地球水循環研究の意義」について説明があった後、4名の講師から、東ユーラシアの地球水循環に関する各講演が行われました。各講演の後には参加者から多数の質問があり、各講師から詳しい回答が行われました。回収されたアンケートなどからも、気候変動や洪水・渇水と密接な関係が

ある地球水循環の変動に関する一般市民の方々の関心の強さが認識されました。

同センターでは、今後もこのような一般市民向けの公開講演会を毎年定期的で開催する予定です。

（講演テーマと講師）

グローバルに見た東ユーラシアの気候と水循環
東京大学大学院理学系研究科 松本 淳 助教授

東シベリアの水循環 -凍土・森林・大気の相互作用-
名古屋大学地球水循環研究センター 檜山哲哉 助教授

衛星によるユーラシア大陸の陸域水循環観測手法の開発
東京大学大学院工学系研究科 小池俊雄 教授

アジアモンスーンにおける水循環の役割
名古屋大学地球水循環研究センター 安成哲三 教授





特許セミナー IN 名古屋大学を開催

- 「知の時代」にふさわしい技術移転とインキュベーションのあり方 -

12月16日、産学官連携推進本部、先端技術共同研究センター、ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー、特許庁及び中部経済産業局の主催により、特許セミナー IN 名古屋大学がインキュベーション施設で開催されました。

この特許セミナーは、大学が持つ研究成果を適切に特許化し、産業界への円滑な技術移転を促進することにより、産業の活性化を図るとともに、新産業の創出を活発化させることを目的としたもので、70名を超える参加者が熱心に聴講しました。

はじめに、後藤 産学官連携推進本部長及び平野 先

端技術共同研究センター長のあいさつの後、北川善太郎 名城大学教授・京都大学名誉教授により「知の時代の産学官連携～高等研「共同研究モデル」～」をテーマとした基調講演が行われ、続いて清水勇 財団法人理工学振興会専務理事・東京工業大学名誉教授および産学官連携コーディネーターの鈴木信氏により「東工大 TLO の活動状況」と題して技術移転講演が行われました。最後に、辻理 株式会社サムコインターナショナル研究所代表取締役により「ベンチャー企業の創業と戦略」をテーマにインキュベーション講演が行われました。



清水専務理事の技術移転講演



北川教授の基調講演



年代測定総合研究センターで体験学習を開催 - 古代人のテクノロジー体験活動2002 -

12月22日・23日の2日間、年代測定総合研究センターにおいて、「古代人のテクノロジー体験活動2002」が開催されました。これは、オリンピック記念青少年総合センターの子どもゆめ基金助成事業として行われたもので、県内および近隣の小学5・6年生42名、中学生23名を含む81名が参加しました。

この体験活動では、仲井豊 愛知教育大学名誉教授（前同大学学長）を特別講師に招いて、埴輪作りを通

じ、粘土を焼くとなぜ堅くなるのかを考え、また製鉄実験を通して高い温度を得た昔の人のテクノロジーに迫りました。参加者は、埴輪を中空にするのが思いのほか難しく、昔の人はすごかったと感心しながら作品を仕上げました。最後に全員に参加証が手渡され、参加者は焼き上がった埴輪と赤鉄鉱から取り出した鉄と共に持ち帰りました。



満員の会場、テキストを参照しながら実習の手順を聞く



粘土をこねる



もうすぐ埴輪が完成



「農業ふれあい教室」を附属農場で開催

生命農学研究科・附属農場では、11月下旬から4回の土曜日に、今年度で3回目となる「農業ふれあい教室」を開催し、約20組の親子が地元ボランティアの指導も受けながら教室に参加しました。

これは、地域貢献特別支援事業「農業への理解を深める『農業教育公園』」の一環として、地元東郷町の町民大学講座における講演会に続いて開催されたもので、生物循環、資源リサイクル、地球温暖化などについて考える機会になればと企画されました。

今年のテーマは「農業の現場において廃棄しなければならない生物資源を用いたもの作り」として、イナワラを利用した「ワラぞうり作り」及びブドウの剪定枝を利用した「リース作り」の教室を開催しました。

ワラぞうり作りでは、イナワラ打ち、縄ない、ぞうり作りと作業が進み、先ほどまではイナワラだったも

のが自分の手で形が変わっていくことに、多くの親子が感動し、自分で作ったワラぞうりをはいて記念撮影する人もありました。

リース作りは、開催時が12月ということもありクリスマス用に作っている人が多く、基本的には農場内で自然を観察しながら、ナンテン、センリョウ、ナンキンハゼの実、カラスウリ、ミツバアケビ、ヘクソカズラ等のリースを飾る材料を集めました。

教室の様子は地元のケーブルテレビで2度にわたり放映され、この他にも参加者は、「ヤギを科学する」と題して、ヤギの爪切りや、顕微鏡を用い、胃の中に生息する繊維を分解する微生物を観察して、ヤギが草を消化できる仕組み等を学びました。

附属農場では、今後も同事業の一環として、多目的室の建設及びそれを利用した講演会を計画しています。



ワラぞうり作り





農学のフロントランナーを刊行

生命農学研究科・農学部は、このたび、5回目の自己点検評価を実施し、その評価をまとめた「名古屋大学大学院生命農学研究科・農学部年報 農学のフロントランナー 活動 1998～2001」を刊行しました。

この報告書は、「教育・研究の新たな発展への取組み」、「教育・研究の活動状況」、「管理運営と教育研究支援体制」、「研究活動の実績」及び「附属施設の活動」の5部で構成されています。この中では、大学院重点化に際して立てられた、新しい教育・研究の目標に向けて、研究実績を客観的に評価するために、インパクトファクターや論文の被引用回数等を取り入れるとともに、外部資金の受入状況、取得特許数等を記載しています。



農学国際教育協力研究センターが 第9回オープンセミナーを開催

- JICA マラウィ灌漑プロジェクトに関する専門家の報告 -

農学国際教育協力研究センターは、1月10日、「ODA 最前線報告 - 日本の百姓と ODA in AFRICA - 」をテーマに、2002年度第9回オープンセミナーを生命農学研究科において開催し、21名が参加しました。

セミナーは、国際協力事業団(JICA)によるマラウィ灌漑プロジェクトの長期専門家としてマラウィ共和国に赴任している渡部直人氏を講師として、JICAがマラウィで作った巨大な灌漑施設に関する事例が紹介され、同氏の体験に基づく様々な問題点が具体的に指摘されました。同氏は、「アフリカにはアフリカ流で」を、これからのアフリカにおけるODAのあり方についての基本的な考え方とする必要があると強調し、その中身として、(1) 途上国にはゼイタクなものを、(2) 生産量の増大ではなく適正な生産量で、(3) 住民参加型でなく、(4) 人格峻別はできない、(5) 総合的専門家の必要性、(6) アジア型ではなく、の6点を挙げて具体的に説明し、講演後も「“自助努力の尊重”という最近のJICA方針についてどう考えるか？」等、1時間にわたり活発な質疑が行われました。





愛知地区国立学校等生涯生活設計セミナーを開催

12月20日、豊田講堂第一会議室及びシンポジオンホールで「生涯生活設計セミナー」が開催されました。

このセミナーは、本学及び文部科学省共済組合が主催し、愛知教育大学、名古屋工業大学、豊橋技術科学大学、豊田工業高等専門学校及び岡崎国立共同研究機構の共催により、愛知県に所在する国立学校等の文部科学省共済組合の組合員で、年齢が概ね40歳から50歳代前半の者を対象にして、在職中から退職後までを見通して、これからの人生を楽しく豊かで充実したものとするための“生活充実型セミナー”として開催されたもので、6機関から64名が参加しました。

関 総務部長からのあいさつの後、牧野 篤 教育発

達科学研究科助教授による「少子高齢社会の到来とこれからの生活」と題する基調講演に引き続き、森 元浩 社団法人証券広報センター中部支部課長による「低金利下の資産運用」、午後からは、島岡 清 総合保健体育科学センター教授によるストレッチやボールを使った「中高年のための健康づくり」、瀬沼克彰 桜美林大学教授による「生きがいくくりと生涯学習」についての講演が行われました。

参加者は終日、業務を離れて各講演を熱心に聴講するとともに、適度な運動で体を動かしながら、改めて、退職後の生活を念頭に置いた生涯生活設計の必要性を認識するよい機会となりました。



あいさつをする関総務部長



講師の話に熱心に耳を傾ける参加者



ボールを使った軽運動をする参加者



総長等表敬訪問一覧

海外等から総長等を表敬訪問された方々は、次のとおりです。(平成14年10月～12月)

月日	学校等名	国	代表者	来学の目的
10.10	湖南師範大学	中国	Ji Xuefeng 副学長 他7名	愛知学院大学において、日中国交正常化30周年記念講演会出席のために来訪し、その際の本学訪問
10.11	モンゴル国立医科大学	モンゴル	Ts. Lkhagwasuren 学長 他1名	医療協力に対する要望のため(医学部)
11.19	哈爾濱工業大学	中国	Wang Zuwen 副学長 他4名	学術交流についての打ち合わせのため(工学研究科)
11.25	天津財経大学	中国	Zhang Wei 副学長 他5名	学術交流についての打ち合わせのため(経済学研究科)
11.25	FMF 米国招聘事業知立市グループ米国教育者	アメリカ	Belt Timothy 小学校教諭 他19名	教育学部での教員養成に関する事項について懇談を行うため(教育学部)



第25回名古屋大学 OB・職員懇談会を開催

第25回 OB・職員懇談会が12月6日、シンポジオンホールにおいて開催され、OB108名及び現職52名が出席しました。

この懇談会は、本学 OB(本学の課長補佐、事務長補佐、専門員以上の職にあった者で、離職又は転出した職員)と本学の事務局長はじめ部長・課長・事務長等との相互の交流を深め、また本学の運営に資することを目的として、昭和53年から毎年開催されているものです。

懇談会は、松尾 総長による大学の現状等の報告を兼ねた歓迎のあいさつで始まり、山本 鉞 元事務局長(学校法人三浦学園監事)及び内田弘保 元事務局長(日本育英会理事長)のあいさつに続いて、小池事務局長の発声で乾杯しました。

会場では、あちらこちらで会員らが旧交を温め、終始和やかな雰囲気の中で懇談が行われました。



新任部局長等の紹介



大学院理学研究科長・理学部長
大峯 巖
(おおみね いわお)
昭和20年12月7日生
平成15年1月1日発令
(略歴)
昭和49年9月
パリ第7大学研究助手
昭和51年10月
マサチューセッツ工科大学博士研究員
昭和55年4月
マサチューセッツ工科大学研究助手
昭和56年6月
慶應義塾大学助手
昭和57年12月
岡崎国立共同研究機構助教授
平成6年4月
名古屋大学教授(理学部)
平成8年4月
名古屋大学教授(大学院理学研究科)
平成15年1月
名古屋大学大学院理学研究科長・理学部長
(15.1.1 ~ 16.12.31)



高等教育研究センター長
黒田光太郎
(くろだ こうたろう)
昭和24年7月19日生
平成15年1月1日発令
(略歴)
昭和54年11月
米国ケース・ウエスタン・リザーブ大学博士研究員
昭和55年10月
米国ケース・ウエスタン・リザーブ大学客員助教授
昭和58年1月
名古屋大学助手(工学部)
平成元年8月
名古屋大学講師(工学部)
平成4年10月
名古屋大学助教授(工学部)
平成9年4月
名古屋大学教授(大学院工学研究科)
平成15年1月
名古屋大学高等教育研究センター長
(15.1.1 ~ 16.12.31)



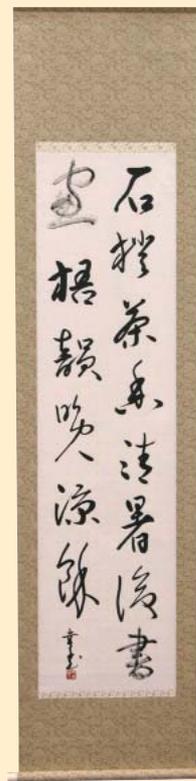
平成14年度 職員創作美術展 作品紹介 書道



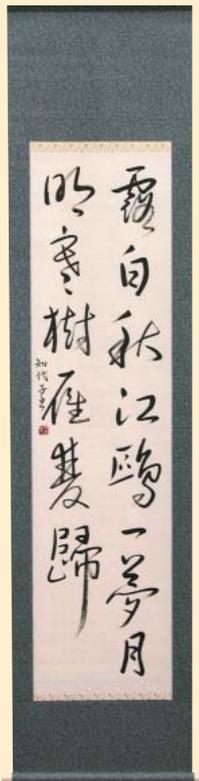
蝶の舞



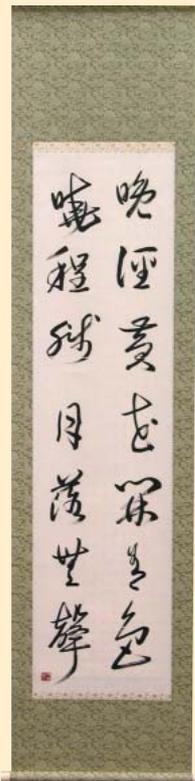
七言絶句



七言絶句



七言絶句



七言絶句



唐詩



発展途上国(マレーシア・ミャンマー・モンゴル)の 保健医療実状に関する調査

伊藤勝基 医学部国際交流室長、加藤武夫 医学部事務次長、青山正晴 経理部主計課専門員、高田義雅 医学部学務課卒後臨床研修掛長の4名は、平成14年11月3日から11日までの9日間の日程で、マレーシア・ミャンマー・モンゴルの3か国を訪問し、ヤング・リーダーズ・プログラム(YLP)の説明及び現地の医療事情の調査を行いました。

3日に名古屋空港を飛び立った一行は、7時間以上かかってマレーシアのクアラルンプール(KL)に到着しました。気温30度、蒸し暑く時々スコールに見まわれる中、早速、保健省病院部門部長 Abdul Gani Bin 氏及び名大法学部に留学経験を持つ外務省職員 Azrul Anaz 氏と会談を行い、YLP については是非とも留学生を送りたいが、経済的理由で TOEFL を受験できないので、実務経験で考慮願いたいと要請がありました。

4日には、Azrul Anaz 氏の案内で、午前には Univ. Malaya, Univ. Putra Malaysia の2か所、午後からは Univ. Tenaga National, Hospital, Multimedia Univ. の3か所の施設を見学しました。各大学、病院共にたい

へん良く整備されており、特に、Univ. Malaya には日本文化研究館があり、その中には、天皇皇后両陛下及び常陸宮同妃両殿下が御訪問されたのを記念して建てられた施設もありました。同大学では日本語教育にたいへん力を入れているとのことでした。

5日、KL を出発し、二番目の訪問国ミャンマーのヤンゴンに到着しました。ここも気温30度、蒸し暑い中、現地通訳の Kyaw Soe 氏の案内により JICA 事務所を訪ね、佐々木隆宏 所長と木滝真之 企画調査員と会談を行いました。同事務所の側にはアウンサンスーチー女史の住居があり、車は進入禁止とされていました。その後、日本大使館を訪問し、高橋暁子 専門調査員に YLP の説明を行うと同時に、現地の保健事情、医療制度について意見交換を行いました。

6日には保健副大臣・審議官 Mya Oo 氏を表敬訪問して会談を持ちましたが、YLP について強く派遣の要請があり、40代後半の者を6～8名日本に派遣させることができるが、年齢及び人数の制限枠について考慮願いたいとの意見が出され、検討課題としました。続



ミャンマー保健副大臣と記念撮影



ミャンマーの寺院風景

いて科学省事務局長 Pe Thet Htoon 氏を訪問し、YLP の説明を行いました。午後には、ミャンマーの代表的な寺院 SHWEDAGON PAGODA を見学しました。

7日、JICA 事務所を再度訪問し、前日の会談内容を報告したところ、JICA として本学の途上国支援に対する熱意に対して謝辞があり、今後とも大きな期待をしているとのことでした。

その後、ヤンゴンから、バンコク、北京経由で移動し、8日にモンゴルのウランバートルに到着しました。気温氷点下5度、晴天ですが35度の気温差は体に堪えます。ここでは本学国際開発研究科交換留学生の中村真咲さんの出迎えを受けました。早速午後から日本大使館の高橋由里子書記官を訪問した後、本学法学研究科交換留学生だったモンゴル国立大学法学部講師 Batbold Amarsanaa 氏の通訳により、保健省の No. 3 の Ts. Sodnompil 氏を訪問しました。続いて JICA 事務所を訪問して雨貝哲雄 次席と懇談を行い、さらに国立第一病院を訪問して Ts. Mukhar 院長及び関係者と懇談及び施設見学を行いました。最後にモンゴル医科大学を訪問し、Tserenkhoo Lkhagvasuren 学長及び S. Narantuya 副学長他大学の幹部らと会談を行いました。

会談では本学に対し、学術支援についての強い希望がありました。

9日は10:00から保健省を訪問し、若手幹部らに YLP のプレゼンテーションを行いました。続いて保健省国際健康センターを訪問し、S. Dulamsuren 所長ら幹部との会談を行った後、保健大臣を表敬訪問し、モンゴル迎賓館において、同大臣、国際健康センター所長、在モンゴル大使館 当田達夫 大使、同 清水武則 参事官が同席する昼食会へ参加しました。午後は郊外の小学生野外学習センターを見学し、その後、モンゴル医科大学長、同大副学長及び JICA 派遣隊員として国立第一病院に勤務の工さん（前本学医学部病院看護師）との夕食会に参加しました。

10日には、地方の医療事情を見学する予定でしたが、前夜からの降雪で危険との判断により中止し、市内の博物館 NATURAL HISTORY MUSEUM を見学しました。

11日にウランバートルから北京に移動し、12日に帰国しました。短期間に3か国を訪問し、医学系研究科が準備している YLP に対して、どの国においても大きな期待を寄せていることを痛感して帰途につきました。



モンゴル保健大臣と記念撮影



モンゴルの大平原

INFORMATION

本学関係の新聞記事掲載一覧（14年12月分）

	記事	月日	新聞等名
1	上村大輔・理学研究科教授ら トガリネズミの麻酔物質を特定 ほ乳類で初	12.2(月)	日経(朝刊)
2	半田で東海学生駅伝 愛工大輝く 2連覇 名大・嘉賀正選手 2年連続区間新記録	12.2(月)	中日(朝刊)
3	「第一回坂田・早川記念レクチャー」 (名大・名古屋市科学館共済) 名大出身の物理学者・益川敏英さん が「坂田理論が切り開いたもの」と 題し記念講演	12.3(火) 12.11(水) 12.28(土)	中日(朝刊) 他2社
4	名大サロンの主役：福田真人・国際 言語文化研究科教授 結核は 「美と才能の病」と題し解説	12.3(火)	中日(朝刊)
5	砂漠に緑 挑む学生たち 高校生 や名大生が植林に参加	12.3(火)	朝日(朝刊)
6	万博市民参加意見出し合う 「NPOが万博とかかわる際の材料 が提供できれば」コーディネーター 後房雄・法学部教授	12.3(火)	中日(朝刊)
7	医学部附属病院に日本画贈る 入院 のお礼にと、小牧の松永明雄さん	12.3(火)	中日(朝刊)
8	教育 Web：名大で「21世紀 COE プログラム」に採択された研究グル ープの代表らと交えて「科学 研究オープンシンポジウム」テー マは「新たな研究教育拠点と大学 の将来」	12.4(水)	読売
9	「第13回日本臨床スポーツ医学会 学術集会」(会長・佐藤祐造・総合 保健体育科学センター教授) テーマは「臨床スポーツ医学の 新たな挑戦」1220人が参加、関心の 高さ示す	12.4(水)	読売
10	老年学：肺炎防止に歯磨き励行 井口昭久・医学系研究科老年科教 授	12.4(水)	朝日(朝刊)
11	地球水循環研究センター公開講演 会 テーマは「東ユーラシアの地 球水循環」シンポジオン・ホール	12.4(水)	読売
12	野依教授に聞く ノーベル賞が示 す課題 「欧米頼みでは花咲かぬ」	12.5(火)	朝日(朝刊)
13	医療ルネサンス：再生医療の最前 線 崩れた歯槽骨が成長 医学部 附属病院で自分の細胞を使って治 療	12.5(火)	読売

	記事	月日	新聞等名
14	アトピー性皮膚炎 医学部環境皮 膚科学講座・早川律子先生に聞く 「一つの体質」と考え対策冷静に	12.7(土)	読売
15	東海再見：走ることで自分を試す 大切さ知った 元工学部助教授 月尾嘉男・総務省総務審議官	12.7(土)	朝日(朝刊)
16	アフガニスタンの子供 「国際教 育協力懇談会・シンポジウム」に招 かれ、祖国の学校教育の現状話す	12.7(土)	中日(夕刊)
17	名城大75周年祝う 野依良治教授 が祝辞	12.8(月)	読売 中日(朝刊)
18	中部地域産学官連携サミット 名 大などが主催 松尾稔総長ら40人 が集まる	12.10(火)	日刊工業
19	名大などの留学生39人 陶器の街 瀬戸探検 絵付けも体験	12.10(火)	中日(朝刊)
20	理学懇話会 シンポジオンで 吉 田茂生・理学部助教授、川邊岩夫 ・理学部教授が講演	12.10(火)	中日(朝刊)
21	災害情報4カ国語に 名大など翻 訳ソフト開発中	12.10(火)	朝日(夕刊)
22	スーパーサイエンス・スクールに指 定されている岡崎高校の「スーパー サイエンス」で野依良治教授が講演	12.11(水)	読売
23	心筋梗塞発病の関連遺伝子発見 横田充弘・医学部助教授らの研究 グループ	12.11(水)	日経(朝刊)
24	理学研究科・天文物理学研究室理 学懇話会 シンポジオンホールで テーマは「地球の歴史を考える - 形成過程から東海地殻変動まで」	12.11(水)	読売
25	「戦間期」政党政治家の再評価 求められた外交への見識 河田稔 ・環境学研究科教授	12.11(水)	朝日(夕刊)
26	名大で「国際教育協力懇談会・シ ンポジウム」が開かれアフガニスタ ンの子らが招かれた 「平和戻っ たからもっと学びたい」シャハナ ズ・サルダル・アカさん	12.13(金) 12.17(火)	朝日(朝刊) 他3社
27	対イラク戦反対する理学部自治会 「イラク攻撃 NO!の会」名大で 写真展示 戦争で苦しむのは普通 の人々...	12.13(金)	中日(朝刊)
28	日本学士院が昨年ノーベル物理学 賞受賞した野依良治教授ら8人を 新会員に選定	12.13(金)	読売 他4社

	記 事	月 日	新聞等名
29	高山一男名誉教授 肺炎のため死去	12.14(土)	中日(朝刊)
30	環境を考える:『環境との調和』こそ、工学研究の使命 「環境と調和した科学技術の創生が目標」後藤俊夫・工学部教授	12.14(土)	朝日(朝刊)
31	全国一斉学力テスト 文科省分析 「考え、理解する力が不足」浪川幸彦・多元数理科学研究科教授	12.14(土)	読売
32	環境教育の専門家育成を手がける、「エコプラットフォーム東海(EPT)」を環境学研究科など7団体が設立	12.15(日)	朝日(朝刊)
33	音楽のチカラ無限大 名大混成合唱団「コール・グラッツェ」25回記念定期演奏会 プロ作曲家の新作を披露	12.16(月)	朝日(朝刊)
34	中学、高校生らを対象とした「数理ウェブ」を開催 大沢健夫・多元数理科学研究科教授らが話す	12.16(月)	中日(朝刊)
35	博物館コンサート 医学部室内合奏団のフルートカルテットが博物館展示室で演奏	12.17(火)	中日(朝刊)
36	発達心理精神科学教育研究センター協議会が本城秀次センター長、地球水循環研究センター協議会が中村健治センター長を再選出	12.18(水)	中日(朝刊)
37	叙位叙勲 正五位勲五等双光旭日章 元庶務部庶務課長 宮田富三氏	12.18(水)	中日(朝刊)
38	工学研究科教授会が後藤俊夫同科長・工学部長の後任に平野真一教授を選出	12.19(木)	中日(朝刊) 読売
39	10億分の1メートルの穴に、きれいに並んだ酸素分子の構造 京都大、名大などのグループが初めて作成 燃料電池、超電導への応用も	12.20(金)	中日(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
40	来年4月 大学院に『情報科学科』を新設	12.22(日)	中日(朝刊) 朝日(朝刊)
41	IT(情報技術)を生かして 名大で模擬裁判 「法科大学院」に備えた新システム	12.22(日)	朝日(朝刊)
42	来年度の政府予算で 名大に「地震火山・防災研究センター」を新設	12.23(月)	読売 他2社
43	大学院に「メディアプロフェッショナル論講座」新設 来春開講	12.23(月)	中日(朝刊)
44	医学部附属病院 2004年度の法人化へ向け 医療経営管理部を設置	12.23(月)	読売 毎日(朝刊)
45	地震が起きやすいのは「東海」より「東南海」説 安藤雅孝・地震火山観測研究センター教授が新たな考えを示した	12.23(月)	中日(朝刊)
46	研究室発:環境や集団で違う空間認知 岡本耕平・文学部教授	12.24(火)	中日(朝刊)
47	財団法人東海学術奨励会 優秀研究20件に助成金 愛知県、上田晃弘・生命農学研究科研究員など	12.25(水)	中日(朝刊)
48	大学囲碁選手権 名大連勝し勝ち点3へ	12.25(水)	読売
49	総合保健体育科学センター教授会が高橋俊彦教授をセンター長に再選出	12.26(木)	中日(朝刊)
50	東大が大学囲碁日本一 名大は4位	12.27(金)	読売
51	医学の現場から:ロボット使い人工関節手術 「二週間ほど入院期間が短くなっている」名古屋共立病院リウマチ・人工関節センター長 岩田久名誉教授	12.27(金)	中日(朝刊)
52	愛知県警科学捜査研究所の3人の職員 大学院の研究生として研究に励み医学博士の学位を取得	12.29(日)	中日(朝刊)

本誌に関するご意見・ご要望・記事の掲載などは企画広報室にお寄せください。

総務部 企画広報室 企画広報掛

電話:052(789)2016

FAX:052(789)2019

E-mail:kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

ちよっと名大史

古川総合研究資料館 (旧古川図書館)

東山キャンパス豊田講堂の南西に位置する古川総合研究資料館は、1969年に完成した建物です。名称は故古川為三郎（日本ヘラルド映画株式会社の創立者）・志ま御夫妻から建設資金の寄付をいただいたことに因みます。

名古屋帝国大学創設当時、医学部のある鶴舞キャンパスに旧愛知医科大学時代に建てられた図書館がありましたが、ここに大学全体の図書館本館および医学部分室がおかれまして。当時からすでに、地元官民各界の建設敷金寄付によって東山新キャンパスに新図書館を建設する計画がありましたが、戦中戦後の混乱の中、その実現は困難をきわめていました。敗戦後の1948年、名城新キャンパスにあった旧歩兵第六連隊の兵舎建物に本館が移転しましたが、これもあくまでも暫定措置と考えられていました。

そして前号でもふれましたが、東山キャンパスの整備計画が進む中、前述の寄付が実現、古川図書館が建てられました。設計者は谷口吉郎 東京工業大学教授で、二階建てにみえる三階建てや、東西に長く広く設計された吹き抜けの空間配置などは、平行するグリーンベルトの傾斜や東西の広がり考慮に入れてデザインされているそうです。

1981年にグリーンベルトの西側に新中央図書館が完成した図書館が移転した後は、古川総合研究資料館となり、現在は名古屋大学博物館や年代測定総合研究センターなどが入っています。



完成当時の写真



博物館入口そばに残る銘板



鶴舞キャンパスの図書館（1935年）



(東山キャンパス)

名古屋大学の歴史に関する記念碑・記念物に関する情報をお持ちでしたら、
大学史資料室（052-789-2046）へご連絡下さい。